

第 52 回インナーゼミナール大会

研究計画書

| | | | |
|--------|---|------|---------|
| ゼミ名 | 石田ゼミ | チーム名 | デカンション節 |
| タイトル | 日本株式市場における季節性アノマリー | | |
| テーマ群 | b) 財政・金融 e) 産業・企業 | | |
| メンバー | 勢田若奈、高橋弘和、濱田広大、元井英政、山本恭輔 | | |
| 研究計画内容 | <p>「研究の背景と目的」</p> <p>日本を含む、世界各国の株式市場のリターンを調べていると、ある傾向があることに気づく。この傾向とは、年後半に比べて前半の方が平均月次リターンが高いという傾向である。この季節性は、学術研究としては最初の Bouman and Jacobsen (2002)以降、ハロウィーン効果と呼ばれ金融経済学の「謎」として長年研究されているが、効果の根拠は未だに解明されていない。この効果が前半のリスクの高さの対価として表れているのか、それとも気温・日照時間等の季節差が非合理的な投資家心理に影響を与えているからなのかを明らかにするのは資産運用を考えるうえで非常に重要なことである。そこで、本研究では、日本株式市場に焦点を絞り、これまでの先行研究の結果を含みながら、先行研究でされていなかった新しい角度からハロウィーン効果について分析し、その正体について考察していきたい。</p> <p>「研究内容」</p> <p>本研究ではデータとして、Financial QUEST から業種別日経平均株価のデータを取り分析する。Jacobsen (2009)が行った米国市場に関する先行研究では、食品・消費財などの消費者志向セクターはハロウィーン効果が弱く、建設・鉄鋼などの景気の変動を受けやすいセクターはハロウィーン効果が強いという結果が出ている。米国市場以外にも同様な傾向があるかどうかはハロウィーン効果の原因を探るうえで重要であるが、日本市場を業種別に分析した先行研究をみつけることはできなかった。そこで、本研究では日本株式市場における 36 業種別日経平均株価のデータを用いる。各業種の月次リターン・データを R という統計分析ソフトで解析し、そこで観測することができたハロウィーン効果に関してリスク説、投資家心理説の両面から様々な仮説を立て根拠を探っていく。</p> <p>「期待される効果」</p> <p>本研究では、データから観測する事が出来た、季節性アノマリーの明確な根拠を示すことが最も期待される効果である。これまでの日本市場に関する先行研究のデータのとり方と違い、36 業者に分類した日経平均株価を本研究では用いるため、先行研究では発見することができなかったハロウィーン効果の原因を示すことを期待できる。発見した原因を詳しく分析し、信頼度の高い根拠にしていきたい。</p> <p>「参考文献」※英語論文は DeepL を利用して機械翻訳し解読</p> <p>Jacobsen, B (2009) "The Halloween Effects in the U.S. Sectors," <i>Financial Review</i>, 44, pp.437-459.</p> <p>Bouman, S. and B. Jacobsen (2002) "The Halloween Indicator, "Sell in May and Go Away": Another Puzzle," <i>American Economic Review</i>, 92, pp.1618-1635.</p> | | |